

◇橋本左内の「桃井伊織」、坂本竜馬の「才谷梅太郎」など、幕末は多くの人物がよく名前を変えました。諸藩の密航者たちも幕府の法を侵犯している身分ですから、仕える御家に迷惑が及ばないように名前を変えています。薩摩藩の畠山義成は杉浦弘蔵、森有礼は沢井鉄馬、松木弘安は出水泉蔵・・・といったように。

日下部太郎の同志、横井兄弟も密航で留学し、現地では変名を名乗っているため、グリフィスも左平太を *Ise* (伊勢佐太郎)、大平を *Numagawa* (沼川三郎) と呼んでいます。横井家は伊勢平氏ですし、住居は熊本の沼山津にありました。◇福井藩士八木郡右衛門の長男八十八も、密航で留学したわけではありませんが、渡米にあたって本姓の「日下部」を称し「太郎」を名乗りました。彼以前の諸藩からの留学は皆密航ですから、海外渡航という大事を成すにあたって変名したのは自然なことと思われま

す。ちなみに「姓」と「名字」は今日では同じですが、もともとは別でした。名字は所縁の地名などからつけられた家名ですが、姓は古く天皇から賜った一族の称を起源とします。徳川家や南部家は「源」、井伊家や伊達家は「藤原」、加賀前田家は「菅原」などです。羽柴秀吉は「豊臣」ですね。八木家の姓は越前の戦国大名朝倉家と同じく、「日下部」でした。「姓」に復する事は天皇とのつながりを強く意識する、維新期の精神の現れでもあります。

◇当館敷地にある「墮涙碑」は息子の死を悲しんだ郡右衛門（号は米齋）が八木家の墓域に建立を願ったものです。（八木家の菩提寺は福井市内の清円寺です）碑文を書いた吉田東篁は福井藩の学問を興隆させた人物として名高いですが、この時（明治六年 1873）すでに数え六十六歳、二年後に亡くなっています。

碑文の内容は、文武両道で洋学にも通じた八十八青年が留学生に選ばれ、改名を決意し、海軍力がなく外国に脅かされている祖国の現状への憂いと、それでも若い自分が必死で勉強すれば決して西洋人に負けず、日本こそが国際正義を回復できるという気概を父に語って旅立った事を伝えています。

東篁は、日下部の夭折は単に本人の無念にとどまらない損失であると嘆き、天皇が学制を布いて以来多くの洋学者が全国で教えているが、「利禄」を求めるものばかりで、太郎の如き志のある者が今日何人いるかと憤ります。建碑による太郎の顕彰により、その志の継承がなされる事を何よりも願ったのです。

◇日下部の最期を知り、そこに武士道の精華を見た吐露したグリフィスの思いもまた、東篁と同じでした。建碑が実現したのは東篁の死から実に百年後でしたが(1976)、その半世紀前に福井を再訪したグリフィスは建碑の実現を願い、誰よりも日下部の顕彰につとめた当時の福井市長永井環に少なからぬ寄付金を渡していました。「日下部太郎」の名を今日に伝えたのは、志のリレーでした。

資料 「密航、留学、維新」

- 1858 幕府が米国やオランダ、英国などと通商条約を締結。
1862 幕府留学生派遣（オランダ A）。 薩摩藩による英国人殺害事件。
1863 将軍家茂上洛、天皇に攘夷決行を迫られる。
長州藩留学生密航（英国 B）。 薩摩藩と英国の戦争。
1864 新島襄の密航（翌年米国入国 C）。
1865 薩摩藩留学生密航（英国 D）。天皇が通商条約を認める。
1866 薩摩藩留学生再び密航、横井左平太・大平兄弟の密航（米国）。
幕府が日本人の海外渡航を許可。 =ここまで、諸藩からの派遣は密航
1867 福井藩留学生日下部太郎の渡航（米国）。大政奉還。
1868 戊辰戦争。

○A 幕府のオランダ派遣留学

- ・文久二年九月(1862)長崎発、三年四月オランダ着
慶應二年十月(1866)オランダ発、三年三月横浜着
 - ・内田恒次郎、榎本釜次郎（武揚）、澤太郎左衛門、田口俊平、赤松大三郎ら幕府海軍士官五名がデン・ハーグの海軍兵学校などで修学。
 - ・水夫の古川庄八と山下岩吉、船大工の上田寅吉は造船所で船舶運用・設計を、
鑄工の中島兼吉は製鉄・大砲作りを、時計師の大野弥三郎は測量器械製作を
学ぶ。器械製作を学んでいた鍛冶屋の大川喜太郎は慶応元年八月に客死。
 - ・伊藤玄伯、林研海は医師として海軍医学校、海軍病院で学ぶ。
 - ・西周助、津田真一郎はライデン大学教授の個人指導で法学、政治経済を学ぶ。
- ※幕府はロシア(1865)、英国(1866)、フランス(1867)にも留学生派遣。

○B 長州藩士のイギリス密航

- ・文久三年五月(1863)横浜発、九月ロンドン着
- ・井上聞多（馨）、伊藤俊輔（博文）はロンドン大学の A. Williamson 教授に師事するも、藩の危機を知って緊急帰国（元治元年三月.1864）。
- ・山尾庸三、野村弥吉、遠藤謹助の三人は勉学を続け、明治元年(1868)に帰国。
山尾は工学教育、野村は鉄道、遠藤は造幣などの分野で大きく貢献。

○C 新島襄（上州安中脱藩）の北米密航

- ・元治元年六月(1864)函館発、慶応元年六月(1865)ボストン着
- ・アマースト大学、アンドーバー神学校などで学び、明治七年十一月(1874)日本にクリスチャン・カレッジを設立する意志で帰国。翌年同志社英学校、開校。

○D 薩摩藩のイギリス派遣密航留学

- ・慶応元年三月(1865)薩摩串木野発、六月ロンドン着
 - ・五代友厚の献策＝藩主導で密航。長崎の商人グラバーが協力。
 - ・総勢十五名。うち六名は慶應三年七月(1867)に米国へ移る。
 - ・そのひとり畠山丈之助(義成、在米時の変名杉浦弘蔵は随涙碑の文中にもみられる)はラトガース大学で日下部と共に学び、帰国して東京開成学校初代校長としてグリフィスと共にはたらく。
 - ・市来勘十郎は変名の松村淳蔵の方で知られる。横井左平太と共にアナポリスの海軍兵学校で学び、帰国して日本海軍士官教育に尽力。海軍中将。
 - ・森金之丞(有礼)は維新後日本政府の米国駐在外交官となり、在米の新島襄に政府資金の提供を申し出るが、断られる。グリフィス、西周、津田真道らも参加した学術団体明六社の社長をつとめる。文部大臣在任中に暗殺。
- ※薩摩藩は慶応二年には米国にも密航留学生八名を送り出した。その一行の内、木藤市助が精神的に追い詰められ翌年に自殺した事は、日下部も現地で知って発奮している。仁礼平助(景範)は後に海軍大臣となった。

○佐賀藩士のイギリス密航

- ・慶応元年十月(1865)長崎発、二年二月アバディーン着
- ・英学伝習生の石丸虎五郎と馬渡八郎が、芸州藩の医学生野村文夫と共に、海軍学を志し渡英。三人の密航・修学には長崎の貿易商人 J.グラバーの支援が大きい。佐賀藩は長崎警護を担って長年積み重ねた先進的事業の苦勞が実り、他藩に抜きん出た科学・軍事・情報力を誇る大藩として重要な存在だった。明治元年(1868)四月に帰国。石丸は電信整備に尽力、馬渡は大蔵官僚、野村はジャーナリストとなった。

○幕府のイギリス派遣留学

- ・慶応二年十月(1866)横浜発、十二月サザンプトン着
- ・川路聖謨の孫、太郎たち十四名が修学。駐日公使 H.パークスが付けた世話役と現地で対立するなど困難があったが、この一行は多くの偉材を輩出した。
- ・儒者の中村敬輔(正直)は帰国の際に贈られた書籍の内容に感動して翻訳。その『西国立志編』は明治の書生たちの愛読書となる。教師として来日したグリフィスや、その親友 E.W.クラーク(グリフィスが静岡藩校の教師に推薦した)と親しくなり、グリフィスと同じく明六社にも参加している。
- ・明治元年七月(1868)に帰国した時、すでに幕府は滅んでいたが、数学者菊池大麓、外務大臣林董、帝大総長外山正一たちの、若き日の貴重な経験となった。

○最初の留学生のひとり、榎本武揚（1836～1908）

父の円兵衛は備後の郷土出身で、江戸で伊能忠敬の弟子となり、のち「伊能図」の作成に貢献した人でした。御家人榎本家の養子に入り、息子の釜次郎が昌平黌（幕府の学校）に入学する頃には旗本の身分に出世していました。

釜次郎青年は、米露からペリーやプチャーチンの艦隊が来航した翌 1854 年、函館奉行の従者としてエゾ（北海道）、樺太の探査に参加。この経験が戊辰戦争の時に生かされます。

日米の通商条約が結ばれて幕府・諸藩・朝廷が大きく動揺し、まさに「幕末」の政局となる前年（1857）、長崎海軍伝習所の二期生となり（勝海舟は一期生です）、オランダ海軍士官のヴァン・カッテンディーケたちから蒸気艦のしくみ・動かし方から兵術にいたるまで学びました。海軍医官のポンペ・ヴァン・メーアデルフォールトから学んだ化学は留学中も研鑽を積み、当時日本有数の知識を身に着けます。理化学教師として来日したグリフィスと会っていたら、きっと話ははずんだでしょう。

長崎で三年学んで江戸に戻ってからは、築地の海軍操練所に勤める傍ら、米国に十年滞在した中浜万次郎（ジョン・マン）に英語を学びました。当時、幕府が米国に軍艦を発注し、その受け取りに派遣する人員を数年間現地に留学させる計画がありました。結局、米国で内戦が勃発し（南北戦争）、発注先とともに榎本たちの留学先もオランダに変更されました。この時にオランダで建造された開陽丸が、戊辰戦争で旧幕艦隊の旗艦として活躍し、エゾで座礁・沈没した事はよく知られています。

1862 年 11 月に出国、翌年 6 月にオランダに到着し、以後三年半の間、船についてはもちろん、化学・技術を広く学び、国際法の理解にも努めました。開陽丸を操って帰国したのは 1867 年 4 月、大政奉還まで半年という時期です。

翌明治元年、旧幕艦隊を率いてエゾに渡り、五稜郭で新政府に徹底抗戦し、降伏した後の人生はあまり知られていません。榎本の助命に奔走した敵将黒田清隆の元、北海道開拓使の資源探査に実力を発揮し、札幌・小樽発展の基礎を築きます。駐露公使として日露領国の国境画定という大きな案件を解決した後、あえてシベリアを横断して帰国、その二か月間の「日記」は歴史資料としても貴重です。海軍のトップとして海上法規の作成を主導した後、再び公使として今度は清国に駐在、両国間の危機調停に成功したのが日清戦争の十年前。その年はじめて発足した内閣を含め、六つの内閣で閣僚となり、政界での最後の仕事は足尾鉍毒事件の本格的調査でした。その学識を生かし、電気学会や工業化学会の初代会長も務めました。その栄達を福澤諭吉に非難された後半生においてこそ、時代の先駆者として国に大きく貢献した人生だったといえます。